

レファレンス  
余 話

私は電話がきらいである。ベルが鳴るとすぐに緊張してしまう。いやだと思っても、当番になればレファレンス台に出なければならない。毎回冷汗ものである。『あ、あ、あ、もしも、球の体積の公式を知りたいのですが。』『それはですねえ、ええと、』あ、あ、あ、でてこない。あれだけ憶えさせられた  $\frac{4}{3}\pi r^3$  が、何としても思い浮かばないのである。誠になさけない話だが、見えをはってはいけない。こちら科学技術課、数学事典には不自由しない。『〇〇社の数学事典によりますと、球の体積の公式は  $\frac{4}{3}\pi r^3$  です。』こういってまた恥をかく。別に〇〇社でなくても数学事典には、みんな同じ事がある。違っていたらそれこそえらいことだ。よけいな事は言うべきでない。つくづくそう思う。

独断に由来する失敗もある。『あのう、シヴィル・コード・オブ・ジャパンという本ありますでしょうか。』石油関係の公団からの問い合わせである。石油ときたらもういけない。何たってこちら科学技術課、シヴィルときたら、もうシヴィル・エンジニアリングしか頭にない。はなから工学関係と決めてかかっているのである。目録をひいて驚いた。確かにありました。『民法』

こんな例には事欠かない。『アイ・イー』という意味が知りたいという電話である。しつこいけれどこちら科学技術課、『IE』ときたら、Industrial Engineering, Institution of Engineering。しかし、それだと意味が通じないし、小文字で書かれているというのである。小文字ねえ、何げなく手元の英和辞典をひいてみる。そして恐る恐

る『あのう、ひょっとしての ID EST 略の i.e. で、即ちという意味じゃないでしょうか。』『あ、あ、あ、合う。それです。』

ひとさわがせな電話もたまにはある。当館では、一般の電話レファレンスは午後五時以降は受けないことになっているのであるが、ある時、直通電話が、人気のない事務室で鳴響いた。新潟地震の発生年を教えてくださいという。今日は、もう終わったので、明日回答すると答えたが、とにかく急いでいるので、今すぐ回答がほしいというのである。むこうの電話口はずいぶん賑やかだ。いったいどういう所からかけているのだろうと思ひながら、気象年鑑で1964年と答えた。その途端、『ヤッター』『ソレ見ろ』といった喚声。そして『ありがとう』ガチャ。多分酒席で、新潟地震が話題になり、発生年にいくつかの説が出て、それじゃあと、かけになったのだろう。国立国会図書館、色んな所でお役に立っているようである。このようなクイズの類には回答しないようになっているのだが、電話だとそれはわからない。依頼者がどういう状況なのか、こちらには皆目見当がつかないのである。無論レファレンスは、相手の依頼に対して、たんたんたと答えればよいのだが、このたんたんたがいけないことがある。『パラフレニアの意味を知りたいのですが。精神医学関係の用語だと思います。』『少々お待ちください。精神医学事典で探してみましよう。』『ありました。』と言って、こちらは何のためらいもなく、その説明を読みあげる。突然の沈黙。こちらから呼びかけても全く返事がない。やがて『私は、もうがっかりしました。』という力のない言葉が返って来た。依頼者は、ゆっくりと何故電話をしたのかを話し始めた。自分のカルテを見てしまったと言うのであ

る。こちらは、初めて事の深刻さを知る。もう何と言っているかわからない。相手の落胆ぶりが伝わってくる。電話は、余りにリアルすぎる。本当に怖い。いやである。この電話を切る時に、私は何と言ったのか、全く憶えていない。

電話レファレンスというのは本当に難しいものである。のりを越えてはいけない

し、かといって、ほんのチョイというのも、依頼者には、不満が残るだろう。それにスピードも要求されている。レファレンスに移って、早2年が過ぎたが、この電話というお化けを相手に、科学技術課のひよっこは、今日も苦戦を強いられている。

(科学技術課 村山隆雄)

## ——探訪記——

### ユダヤ・コレクション「酔茶堂文庫」 と杉田六一氏 (1897~1976)

中 林 隆 明



日本にはユダヤ人問題はないが、ユダヤ人論議は存在する。「古代オリエン特で姿を消したユダヤ10支族の一つが渡来した」と言う、いわゆる「日猶同祖論」がそれで、小谷部全一郎、酒井勝軍等が代表する。また有名な景教研究家佐伯好郎が明治末期唱えた、帰化人秦氏を以ってユダヤ人となすの論もあり、これらの論議を信ずれば古代にまで遡り得る。しかし最初の来日を幕末期とするのが一般的で、以上の説には充分な根拠がない。

ここで杉田六一氏を登場させよう。来日ユダヤ人を実証的態度で追求する同氏は、「日猶同祖論を追って」(昭和47)を始め、いくつもの著作を発表している。ユダヤ人の墓地として、長崎の外人墓地にも言及、のちユダヤ人社会は神戸、横浜に中心が移り、やがて消滅したと言う。彼がユダヤ人問題に指を染めるに至った経緯は次のようだ。

旧制の中学生の時、叔父から聖書を贈られたのが契機で、ユダヤ史研究を志した。のち精進湖畔にある精進ホテルの経営に当る。その間、時のイギリス皇太子(のちの

エドワード8世、シンプソン夫人との恋に生きるため退位、ウインザー公となる)を迎えた(来日は大正4年4月13日)。この為俄然有名になり、ホテル経営が軌道に乗った。昭和初期から資料収集を始めたが、昭和18年夫人の関係で日光湯元に転居。土産物店経営の傍、念願の研究生活に入り、32年頃からその成果を次に発表する。一方日本オリエン特学会にも加わり、地元栃木県にも支部を設置するなど積極的に活動した。

研究生活40年の結果として関係資料は相当充実、和書は日猶同祖論、洋書はヘロデ大王時代を中心にしたユダヤ史関係をそれぞれ特色とする。合計約4,000冊。特に1948年の建国以後のイスラエル関係新聞切抜帳はユニーク。蔵書印は「酔茶堂文庫」で、研究者にも解放されていたが、昭和51年8月氏は長逝された。冥福を心から祈りたい。なお蔵書は今日も生前のままの状態で、雪深き日光湯元に眠っている。しかるべき機関に収められ、杉田文庫として再出版、斯界に貢献する日を期待したい。なおこの小文は前年の3月氏を訪問した時の談話に基づく。